
ラジックの相談所 第三話

とよたかゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラジックの相談所 第三話

【Nコード】

N7463U

【作者名】

とよたかゆき

【あらすじ】

ユトーの上司クラナがラジックを授かる。

第三話

何気ない平日の昼下がり。

「はあー、うまかったぜ」

俺はちょうど昼食のサンドイッチを部屋の中で食べ終わったところだ。今日の天気は晴れ。雲一つない青空がこの相談所の上には広がっている。できれば外に出てラジック神殿の床にマットを広げて昼寝でもしていた気分だな。さぞかし気持ちのいいことだろう。もちろん仕事があるのでそんなことは許されないのだが。

「昼食休みも短いんだよなあ。もっとゆっくりしたいぜ」

昼食をとったばかりの俺はせめて食後のコーヒーをゆっくりと楽しむ……ぐらいの幸せは享受したかったのだが、運悪くこの時間はラジック相談所に訪れてきたお客さんの対応をしなければならなかった。

「あのう、すまんがのう……」

男性の老人が一人、部屋の中に遠慮がちに入ってくる。

「ラジックとかいうもんの相談はここでええんかのう？」

おそらく年齢は八十を超えているだろう。髪はほとんどなくなっているし顔も深いしわが刻まれている。だが、足腰はしつかりしているようだ。ゆっくりだが危なげない足取りで歩いてくる。

「はい、どうぞ。ラジックに関するご相談ですね。ひとまずこの椅子にお座りください」

俺は部屋の真ん中の大きな長机にその人を座らせる。

「ふう。この年になるとこんな小さな山を登るだけでも大変じゃな」「ご足労かけてすみません。俺も毎日、この職場まで来るのは大変です。ここに神殿を建てたやつを恨みながら朝な朝な階段を上って

いますよ」

「ははは、そうかおぬしも大変じゃな」
「自分も席に着く前に尋ねる。」

「コーヒーでも淹れましようか？」

「いや、けっこうじゃ。ご丁寧にどうも」

「ご老人はすぐに話を始めた。」

「わしはコルネオ・マンスーリという者じゃが。昨日の晩、ついに噂に聞いておったラジックとかなんとかを授けられたようなんじや。夜、寝ておると何か声が聞こえてきたような気がしてのう」

「夢の中で声が聞こえてきて、効力の説明があつたんですね？」

「そうじゃ、そうじゃ」

俺は微笑んで言う。

「それならほぼ間違はなくラジックだと思っていいでしょう。おめでとうございます、マンスーリさん。ラジックを授けられるのは幸運なことですよ」

ラジックの力を与えられるのは一生に一度あるかないかの特別な体験だ。基本的には喜んでおいていいだろう。

「ああ、ありがとう。だがなあ……」

マンスーリさんはいまいち晴れない表情だ。

「そのラジックというものが、わしにはいまいちよくわからなくての。そもそもラジックとはなんなのじゃ？」

「そう、ですね。ラジックとは……」

この質問をされると俺はいつも困る。ラジックとはなんなのかわからないものはこの世にないのではないだろうか。でも仕事上、俺は説明しないわけにはいかない。仕方ないので俺はこう答える。

「ラジックとは、ちよつとした幸運のしるし。神様の気まぐれ、です。魔法のような効力があるのですが、それは本当に些細なものです。あまり過度な期待はしないほうがいいでしょうね」

マンスーリさんはわかったようなわからないような感じでつぶや

く。

「……はあ、そういうもんか」

無理もない。この説明でわかる人間など存在しないだろう。とは言っても俺の方もこれ以上の説明は不可能だ。許してほしい。こちららはずまく説明できないし、むこうもつまり理解できない。なのでこの話題はその辺にうつちやておくのが一番だ。俺は話を進める。

「それで、どういった効力のラジックを与えられたのですか？」

俺の質問にマンスーリさんは眉間にしわを寄せる。

「ふうむ。それがの、どうもはつきりせんじゃ」

「ラジックの効力は本人にとって直感的にわかるものはずです。

よく、思い出してみてください」

ラジックを与えられたこととその効力は基本的には夢の中で教えてもらえる。頭の中に変な声が響いてきてラジックの内容を伝えてくるんだ。しかも、その声が言ったことはラジックが消えるまで忘れてしまうということはない。ラジックの内容はまるで生まれたときから知っていたかのようにわかるものなんだ。だから、この人もラジックの内容が思い出せないということはないはずだ。

「ふうむ、それは確か……」

「はい」

「Dなんちゃらの画質が良くなる、とかなんとか……」

「デイ、Dなんちゃら？」

「ああ。Dなんちゃら、だ。わたしにはまったく聞いたこともないもんだつたな」

「……はあ。Dなんちゃら、ですか」

なんとアバウトな説明だ。もっとはつきりと自分のラジックについてはわかりそうなものだ。だが、聞いたことがない言葉なら理解できないこともあるかもしれない。まあ、この人の場合は年も年だしなあ。

「ほかに何か言っていたことはないですか？」

「いや、これつきりじゃ。それは間違いない」

「そうですか」

となると、Dなんちゃらの画質が良くなる、ヒントはこれだけか。これだけの言葉からラジックの効力を推理しないといけないとは。

「……なかなかの難問ですね」

とはいえ初めからあきらめるいかない。じつと考えを巡らせる俺。

「……画質が良くなる、ですか」

「画質、といえば自然と関係してくるのはテレビやパソコンやカメラなどだろうか。その中でDなんちゃらという名前が付くものは…
…。」

「もしかして！」

俺はピンと来た。マンズーリさんに訊く。

「そのDなんちゃらっていうのは、DVD、のことじゃないですか？」

俺の言葉を聞いてマンズーリさんははっとした表情で尋ね返してきた。

「おっ、なんだって？ もう一度、頼む」

俺はゆっくりと大きな声で言う。

「DVD、です！」

「おお、それじゃ。それじゃよ！」

良かった、ビンゴだ。マンズーリさんは嬉しそうに話す。

「その、DVなんちゃらが良くなるんじゃ、わしのラジックは「なるほど。わかりました、わかりました」

俺は理解した。つまり、マンズーリさんのラジックはDVDの画質が良くなる、つまりDVDをテレビやパソコンで見たときに普通の人よりきれいな画質で見ることができるといふことなんだな。

「はあ、これまたレアな感じのラジックですね」

俺は独り言のように言う。ただ、マンズーリさんの方はまだ自分のラジックのことを理解できない様子だ。またも俺に質問をぶつけてくる。

「それで、そのDVなんちゃらとはいったいなんなのじゃ？」

「えっと、それはですね……」

これまた説明が難しい質問だ。俺は電気屋さんじゃないんだよ。DVDのわかりやすい説明なんて真面目に考えたことはない。しかし、俺としては頑張るよりない。

「そうですねえ。なら、ブルーレイディスクはわかりますか？」

「ブルー……なんじゃと？」

「……いや、なんでもないです」

気を取り直して、

「じゃあ、ビデオテープ、VHSとかはわかりますか？」

「ビデオテープ……聞いたことのある響きだ。昔、うちの息子がよく言っとった気がするのう。ビデオテープ、ビデオテープ……」

マンズーリさんはややあって訊いた。

「なんかスケベなものか？」

「は？」

なんでだよ！　なんでビデオテープがスケベなんだよ！　俺はいちおう説明する。

「い、いや、特別スケベなものじゃないです。スケベなものもないわけではないですが、それは中身の問題ですから。ビデオテープ自体はスケベとかそういうことじゃないです」

「むう、そうか。うちの息子はものすごくスケベじゃったからのう。何か関係があるのかと思った。うちの息子はそりゃあもうスケベでスケベで。まったく誰に似たのやらのう」

「そ、そうですね」

そろそろ頭が痛くなってきたんだが、俺は頑張って話を続ける。

「DVDというのは、まあ、簡単に言えばうちのテレビで好きな映画とかを見ることが出来るもの、ですかね」

マンズーリさんは今度の話ははつきりと理解してくれたようだ。

「なるほど、そういうもんか。好きな映画が見られる、これは素晴らしい。わしも若いときは映画もよう見とったわい。なんだ、ラジックとはいいものじゃないか」

喜ぶマンズーリさん。だが、それはかえってこの先のことが話しづらくなってしまった。

「ええと、しかし、ですね……」

「ん、なんじゃ。まだあるのか？」

喜びに水を差すみたいで言いにくいことなんだが。

「映画を見るにはDVD専用のプレーヤーが必要なんですよ。お持ち……じゃないですよね？」

「プレーヤーじゃと？ テレビなら古いのがあるがの。ほかはわたしにはさっぱりじゃ」

「……ですよね」

しょうがない、話すか。

「つまりですね、マンズーリさんのラジックはDVDとそれ専用のプレーヤーを持っていないとまったく意味のないものなんですよ。

テレビだけでは駄目なんです」

「はあ？ なんじゃと？」

「残念ですが、今のままではラジックは使えません。ディスクとプレーヤーを買い借りるなりしない」と

「……………」

無言のマンズーリさん。それから急に怒った様子になって、

「おまえさん、わしにそのDVなんちゃらを買えと言つのか」

「い、いえ、決してそういうわけではないです」

マンズーリさんはさらに語気を強めて言う。

「そうか、わかったぞ。さてはおまえさん、電気屋の回し者だな。

ラジックとか言いつつわしにもの売りつけるのが目的なんだな！

とんでもないやつだ！」

「お、俺はただの町役場の職員ですよ。落ち着いてください、マンズーリさん」

「うるさい！ だまされるものか！」

マンズーリさんは立ち上がって怒鳴る。

「こんなところ二度と来るものか。まったく何がラジックだ！」

部屋から早足で出て行く。

「とんだ時間の無駄じゃったわい！」

マンスリーさんは怒って帰ってしまった。

「……あーあ、行っちゃった」

俺は開いたままキィキィと鳴り続けるドアの音を聞きながら呆然とするよりほかなかったのだった。

「なんなんだ、いったい」

少しして俺はコーヒーでも淹れようと隣の部屋に向かう。

「でも、マンスリーさんが怒るのも無理はないか。せっかくのラジックが全然意味のないもの、いやそれどころか余計な手間をかけるだけのものだったんだからな」

いつものことながら俺はその巻き添えをくらう格好になったわけだ。

「だいたいなんだよ、DVDの画質が良くなる、って。そんなラジックを年寄りに与えてどうするんだよ」

俺はうんざりしてつぶやく。

「ここの神様は本当に変な神様だなあ」

俺は作ったコーヒーを持って自分の机に座る。

「さて、さつそく今の話を報告書にまとめるか」

俺の仕事はラジックの相談だけでは終わらない。そのほかの雑用が山のようにあって、相談の内容や経緯をまとめたものを作って上司に提出しなければいけないのもその一つだ。

「ラジックの相談なんて変な仕事だが、役所の仕事には変わりないんだからその辺はきちんとしなさいといけないようだ。報告書をまとめるなんて激しく面倒くさいからやりたくないのは当然なんだがな」俺はパソコンを起動させて渋々と作業に取りかかる。

そんな折りだった。

「おっはよー！」

おそろしく元気な声とともに入り口のドアが開いた。

「ユトー君、やってるかあー？」

現れたのは一人の女性だった。短めのプラチナブロンドを揺らして颯爽と部屋の中に入ってくる。彼女は俺の姿を見つけるなり大きな声で言う。

「よしよし、ちゃんと仕事しているわね。えらいえらい」

年は二十代半ばぐらいだろう、俺より少し年上だな。でも見た感じはもっと若く見える。ぱっちりとした目元、それにアヒル口つて言うんだっけ、やや横に広い唇のせいだろう。Tシャツにジーンズというカジュアルな服装も良く似合っている。

「たまにはここに来て現場の様子でもチェックしとかないとね」

俺は作業の手を止めて彼女の方に体を向ける。

「おつはよー、じゃないですよ、クラナさん。もう昼過ぎですよ、昼過ぎ！」

この女性の名前はクラナ・オーフォード。町役場の職員で俺の直接の上司だ。本来なら勤務時間中はずっとこのラジック相談所にいなければいけないはずの人だ。なんで平気でこんな時間に遅刻してくるんだ。

「いや、それ以前にだな」

俺は強い口調で言う。

「なんであんたは毎日きちんとここへ仕事しに来ないんだ！」

この人、遅刻どころか現実にはここに姿を現さない日も多い。いったいどういうことなんだ、これは。

「こんなこと、役場のほかの人たちにはばれたら大変ですよ。ちゃんとしてください」

「あら、ユトー君。いまさらそんな固いこと言わなくてもいいじゃない。実際、君一人でこの仕事はうまくこなせてるんだから。あたしがいたっていなくて同じじゃない？」

「んなわけないでしょうが。あんたの分の仕事まで俺がやってんだ。こっちはもう死にそうだよ！」

俺は悲痛な叫びをあげるもクラナさんは平然と、

「いいのかなー、そんな偉そうなこと言っちゃって。君にはあたし

の車を一つ、安く売ってあげたでしょ？」

「うっ。それはそうですね……」

以前の話の中に出てきた俺が持っているイタリア製の車、あれは実はこのクラナさんから売ってもらったものなんだ。しかも新品同様のものを。給料の安い俺にとってはこの上なくありがたいお話だった。

「なに？ 君は人から受けた恩をもう忘れてしまったの？」

「いや、もちろん覚えてますけど……」

「なら文句言わないの。それで納得しなさい！」

「……はい」

あの車は特別に格安で譲ってもらったという事情もあり、今の俺はクラナさんにまったく頭が上がらない状態なのだ。簡単に言えば俺は車と引き替えに仕事の公平さを失ったというわけだ。うーん、いいのが悪いのか。ただ、向こうはと言うと確実に俺を思い通りに操っているわけだよな。そう考えると向こうの方が一枚上手というわけか。くそっ、見かけによらず恐ろしい女だな、この人。

そのクラナさんはさっきまでマンズーリさんがいた長机の椅子に座りながら言った。

「でも、ユトー君、今日のところはそんなデスクワークは放っておいてもいいわよ。つまらない仕事なんて無視無視」

「えっ。そんなわけには……」

クラナさんはやたらと機嫌が良さそうに話す。

「いいから、いいから。これは上司命令よ」

「はあ」

「その代わりに、今日君はあたしの研究に付き合いなさい」

「クラナさんの研究？」

「そう。あたしの研究のことは君には前に話したわよね？」

「ええ、いちおう……」

このクラナさん、普段は町役場のラジック課の職員として働いているのだが、趣味としてラジックの研究もやっているんだとか。な

んでも古い書物を調べたり外国の似たような話のあるところに行ったりしているらしい。クラナさんの家はものすごい金持ちらしくて個人的な研究資金にも困らないようだ。相談所の仕事をさぼるのもおそらくラジックの研究にかまけているからだろう。俺としてはそのあたり公私の混同はやめていただきたいものなんだが。

「それで、俺は何をすればいいんですか？」

「うん。それはね……」

こちらにニコニコとした笑顔を向けてくる。な、何か嫌な予感があるなあ。

「あたしのラジックを客観的に観察しておいてほしいのよ」

「クラナさんのラジック？」

「そうそう」

「クラナさんもラジックを使えるんですか？」

「うん。そうなの」

クラナさんはこぼれんばかりの笑みを浮かべて話す。

「昨晚、ついにあたしもラジックを授けてもらったのよ！」

あ、なるほど。それで今日はこんなに機嫌がいいのか。

「今まで何年もラジックを研究してきてあたし自身がラジックをもらったのはこれが初めてのことなのよ。それでももう嬉しくて嬉しくて」

たしかにそれは嬉しいだろうな。おめでとう、クラナさん。俺は拍手する。

「ありがとう。でも、喜んでばかりはいられないわ。ラジックの研究者としてはこの絶好の機会になんと少しでも研究を進めないかね」

「まあ、そうですね」

「ただ、自分で自分のことを観察するにはやっぱり限界があるわ。」

そこでユトー君、君に手伝ってもらいたいわけなのよ」

そういうことか。話は理解した。というか安心した。実は俺はまたなにか大変な仕事でも押しつけられすのかと思って俺は内心ではびくびくしていたんだ。だが、ラジックの観察ぐらいのことなら特

に面倒なこともないだろう。相談員として仕事で普段からやっていることの一つだ。クラナさんがいつもここへ来るお客さんの一人だと思えば今回の話を断る理由は特にないだろう。俺はうなずく。

「いいですよ、クラナさん。そのぐらいのことなら引き受けましょう」

「ほんと？ 助かるわ、ユトー君。君には今度おいしいディナーでもごちそうするわね」

「ははは、どうも」

そして、俺は今回の話についての当然の疑問を口にする。

「それで、クラナさんのラジックはいつたいどういう効力なんです？」

「えっとね、それはね……うーん、なんていうか……」

あれ？ 何か話しづらそうなクラナさん。なかなかはっきりとしたことを言わない。さっきのマンズーリさんじゃあるまいし、自分のラジックのことがわからないはずはないだろう。

「なんか、話すのが恥ずかしいのよね。このラジック……」

そんなことをぶつぶつと言っているクラナさん。

そこへ。

ガチャリ。不意に入り口のドアが開く。

「やあ、ユトー。いるか？」

部屋の中に入って来たのはイエスタだった。いつものように眠そうな顔をして、ぶかぶかの白い神官服を着ている。

「あっ！」

さっきまで普通に座っていたクラナさんはイエスタの姿を見るなり立ち上がった、

「きゃー、イエスタちゃん！」

いきなりその体に飛びついていった。

「ようこそ。いらっしやい！」

「うっ、クラナか。おまえもいたのか」

自分の飛びついてくるクラナさんを見てすぐに逃げようとするイ

イスタ。

「く、来るなー。わたしに近寄るなー！」

だが、その甲斐もなく一瞬で、

「はい、捕まえたっ」

「うぐう」

「今日もかわいいわね、イエスタちゃん。ああもう、うちに持って帰りたいぐらいだわ！」

イエスタに抱きついて頭をなでまわすクラナさん。

「よしよしよしよし」

当然、イエスタは嫌がる。

「うにゃー、抱きつくなっ、頭をなでるなっ」

俺はあきれつつその二人の様子を見る。

「あー、また始まったよ」

この人はイエスタを見るといつもこうなんだ。どうもイエスタの見た目と性格が愛らしくてたまらないらしい。まるでペットの相手でもするかのようにべたべたとイエスタを触りまくる。対して身をよじるイエスタ。

「こらっ、クラナ。やめろっ、離せっ」

「ふふふ。イエスタちゃん、ほっぺたもぶにぶにね」

きつく両腕をからませてイエスタの顔に自分の頬を寄せるクラナさん。イエスタは必死に彼女を付き離そうとする。

「おまえはいつもいつもうっとうしいぞ。とにかくわたしから離れる！」

だが、クラナさんも慣れたもんだ。イエスタの抵抗をもともしない。

「駄目よ、あと五分はこうしてかわいがっていたいもの。よしよしよしよし」

「うにゃー。や、やめろお、ク、クラナー！」

「か、かわいすぎる！ 嫌がる姿もかわいすぎる。あと十分に延長よー！」

「うぎゃあ！」

結局、イエスタは抵抗もむなしくクラナさんにされるがままとなる。ぐったりとしたイエスタをぬいぐるみのように抱えるクラナさん。その顔はものすごく満足そうだ。

「うふふ、しあわせえ〜」

やがて、俺は言った。

「もういいですか、クラナさん。そんなことより早く先ほどの話の続きをお願いしますよ」

イエスタが来たせいでぐだぐだになっていたがクラナさんは俺にラジックの効力を説明している途中だったはずだ。

「ああ、そうだったわね。ごめんごめん。すっかり忘れてたわ」

クラナさんはイエスタを床に下ろす。

「ふへえ〜。やっと解放されたあ〜」

イエスタはふらふらと歩いて長机の椅子に座る。それからクラナさんは言った。

「イエスタちゃんにも話しておかないとね。あたし、昨晚、ついに神様からラジックを授けてもらったのよ」

イエスタもそれを聞いて明るい表情を見せる。

「ほう、本当か。それは良かったな、クラナ。ラジック神殿の神官としてわたしも嬉しいぞ」

「ありがとう、イエスタちゃん。今からちようど使ってみようと思っていたところなの。ユトー君に研究を手伝ってもらってね。良かったらイエスタちゃんも見ていてくれる？」

「うむ、もちろんだ」

クラナさんは次は俺に顔を向けて、

「ええと、さっきは効力の説明の続きだったわね」

「ええ、そうです。何かクラナさん、話しくそうだったんですけど……」

「うん。なんか妙な感じのラジックだね。ちょっとあたしにもよくわからないの」

「まあ、とりあえず夢の中で言われたことをそのまま教えてください」

「わかったわ。確かね……」

クラナさんはゆっくりはつきりと言った。

「『ラジックを使うと一回だけ黄色い蝶が現れる。その蝶を頑張つて追いかける』ですって」

思わず無言になる俺。

「……………」

少し考える時間をいただきたい。これはクラナさんが話しくそ
うにしていたのもわかる気がする。なんだって？ 蝶を追いかける
？ 正直、意味がわからない。その辺の子猫じゃないんだ。いい大
人がそんなことをしても何も面白くはない。もしかして馬鹿にされ
ているのだろうか。神様の考えることは本当にわからないな。

みんな黙っている中、先に口を開いたのはクラナさんだった。

「変なラジックよね。研究者であるあたしでも聞いたことがないよ
うなものだわ。でも、特に悪いことになりそうなラジックではない
と思うわ。あたしとしては言うとおりにしてみようと思うんだけど」
確かに意味はないかもしれないが何か迷惑になるようなラジック
ではなさそうだな。せつかくクラナさんが与えてもらったラジック
だ。それを使うことに俺は異論はない。

「それと、もしかしたら……」

クラナさんは意味ありげな表情を浮かべる。

「言うとおりに蝶を追いかけていくと、何かすごくいいことが待っ
ているかもしれないわよ」

「え、どうということですか？」

クラナさんに意外そうな顔を向ける俺とイエスタ。

「あたしがラジックの研究で調べてきた外国の神話の中にはね、神
様の使い、例えば鳥なんかの動物の導きに沿ってついていくと何か
が手に入る、って話がたくさんあるのよ。このラジックもそういう
たぐいのものかもしれないわよ」

「何か、って具体的にはどういうものなんですか？」

「そうねえ。宝物とか」

「た、宝物だと！」

一斉に叫ぶ俺とイエスタ。

「そ、その蝶を追いかけていくと宝物にありつけるのかっ？」

「宝物って、あの金銀財宝の宝物かっ？」

目の色を変えてクラナさんに問い詰める俺とイエスタ。クラナさんはその俺たちの突然の変貌に驚きながら、

「い、いや、もしかしたらの話よ、もしかしたら。あたしのたいして根拠のない憶測に過ぎないわよ」

次には、なんか余計なことを言ってしまったようだ、と後悔の表情を見せる。だが、言ってしまったからにはもう遅い。俺は興奮を抑えきれない。

「宝物……いや充分にありえますよ。なんたってこれほどめずらしいラジックですから。何かきつとすごいものがあるはずですよ」

イエスタも、

「ラジックの神様は偉大だ。宝物ぐらい簡単に用意することができらるだろう！」

クラナさんは苦笑いで言う。

「ま、まあ、ない話ではないわよねえ」

「うおおお、宝物だ、宝物だ、宝物だああ！」

もはや理性を保てずにいる俺とイエスタ。なんたって宝物だ。一攫千金に違いない。そんなものが手に入ればこんな仕事とはおさらばだ。一生働かないで楽に暮らすことができるぞ。庭付きプール付きの豪邸だ、高級車だ、なんだって手に入るぞ。宝物……ああ、なんて夢が広がる言葉なんだ。

「宝物！ ラジックの神様の宝物！」

この言葉に魅了されているのはイエスタも一緒のようだ。

「今まで神官として決して裕福でない生活を強いられてきたわたしたち一家。これはそんなわたしたちに対する神様のご褒美に違いな

い。なんて慈悲深いんだ、ラジックの神様は。うう、これで毎日、お肉が食べられるぞ。神様ばんざーい！ ラジックばんざーい！」
一気にやる気が出た様子のイエスタ。そういやこいつのうちには貧乏だったな。これはイエスタにとっても願ってもないチャンスだろ
う。

「クラナさん、その宝物、見つけたらもちろん三人で山分けですよ
ねっ？」

俺の必死の形相での確認にクラナさんは、

「え、ええ。あたしは別にかまわないけど……」

ややたじろぎながら答える。

「よし。そうと決まればだ！」

イエスタはクラナさんに詰め寄る。

「クラナ、早くラジックを使え！ 一秒でも早く宝物を探しに行くぞ！」

イエスタの勢いに気圧されるようにうなづくクラナさん。

「わ、わかったわ」

一度、深く深呼吸をしてから言う。

「じゃあ、使っわよ。あたしのラジック」

「よし、頼む！」

何か念じるような仕草を見せるクラナさん。

「えいつ」

すると。目の前に鮮やかな黄色の羽を持った蝶が一匹現れたのだ
った。

「おおっ、ほんとに出たぞ！」

興奮して叫ぶ俺。

「良かった。あなたたちにもきちんと思えるようね」

冷静に言うクラナさん。確かに考えてみれば蝶はクラナさん本人
にしか見えない可能性もあったな。

「えいつ、えいつ」

いきなりその蝶を手で捕まえようとするイエスタ。だが、イエス

タの手は蝶の体を通り抜けるばかりだった。この蝶、まるでホログラムのようだ。実体のようなものはないようだ。さすがはラジックだ。

「むむ、捕まえるのは無理そうだな」

あきらめるイエスタ。すぐに、その蝶はひらひらと辺りを飛び始める。

「お、動き出したぞ」

ゆっくりと部屋の中を飛び回る蝶。バレリーナのような優雅さで宙を舞っている。クラナさんは熱心にその様子を見つめている。

「きれいな蝶ね。動きも本物の蝶そっくりだわ」

「ほんとですね。これがラジックとは信じられない」

俺たちが見とれる中、突然、その蝶は部屋の入り口のドアを幽霊のようにすり抜けていった。

「なんだとっ？ 外に出たのか？」

「追いかけてみましょう！」

慌てて外に出る俺たち三人。蝶の姿はまだ相談所のそばにあった。明るい日差しの中、入り口付近の道の上をひらひらと舞っている。

俺たちが近づいていくと蝶は逃げるように先に飛んでいった。イエスタは小走りで追っていく。

「あつ。チヨウチヨが逃げた。こら、待てー」

俺とクラナさんもイエスタに続く。

「ラジックの説明にあった『頑張って追いかける』っていうのはこういうことなのね。つまり蝶と追いかけてこをしろと」

「そのようですね」

俺は気合いを入れる。

「宝物に案内してくれるんだ。絶対に見失わないようにしないと」

ただ、蝶の飛ぶスピードはそんなに速くはない。これならすぐに見失うということはないだろう。蝶は道に沿って相談所の横にある神殿の方へと向かっていった。

それから、

「神殿の中に入っていったぞ」

俺たち三人もすぐに神殿の中へと入る。歩くとカツンカツンと靴の音が響く。大きな石で敷き詰められた床が一般の民家ぐらいの面積に広がっている。その上に規則正しく立ち並ぶ石柱の間を縫うように飛んでいく蝶。

「どこだ、どこだ？」

中は少し暗いので小さな蝶の姿は見えづらい。

「いたぞ。祭壇の方だ」

蝶は床が一段高くなっている場所にある祭壇の近くを飛んでいた。祭壇は白い石で出来ていて立方体の形をした台座のようなものだ。その上を蝶は一回りするように飛ぶと、また奥の方へと向かっていた。クラナさんは眼をその動きを追いながら俺に、

「あの蝶、なかなかじつとしていないわね。追いかけるのもちよつと大変ね」

「ですね。でも、宝物がかかっているんですから。大変なのは当然かもしれませんよ」

「で、でも、まだ宝物があるって決まったわけじゃ……」

「いいえ、絶対あります！」

俺はまばゆいばかりの希望を胸にそう断言する。

「わたしの神官としての勘も絶対に宝物があると言っているぞ」

イエスタも断言する。おお、イエスタのやつ、たまにはいいことを言うじゃないか。

「そ、そう、だといいわね」

あきれたような眼で俺とイエスタを見るクラナさん。まあいいさ、宝物さえ手に入るなら俺はどんな恥辱だって甘んじて受けよう。叫びながら進む俺とイエスタ。

「うおお、待てえー、宝物おおおお！」

蝶はそのまま祭壇の奥へと進んでいき、ちょうど神殿の裏側に当たる場所に出て行った。

「おい、ユトー、クラナ。今度はまた外に出たぞ」

イエスタはしっかりと蝶の後をついていく。神殿の裏にはもう建物は何も無い。この山、神殿山と呼ばれているんだが、ここには神殿と相談所以外の建物は無い。だから、この先にあるのはひまわりが自然に生えている小さな野原と山の木々がうつそうと生い茂る森だけだ。

「やつかいだな。ひまわり畑のほうに飛んでいったぞ」

蝶はそろそろ花の開きかけたひまわりの中を飛んでいく。ひまわりの葉の緑色の中に黄色い蝶が鮮やかに映える。とは言っても蝶の色や姿はひまわりの花とも良く似ているので気を抜いたらすぐにも見失ってしまいそうだ。

「しっかりと見てなくちゃな」

俺の肩のあたりまで高さがあるひまわりをかき分けるように進んでいく俺たち。イエスタなんてほとんど全身がひまわりの群れの中に埋まってしまっている。

「ぶへえ〜、ぶへえ〜」

まるで水中でおぼれているかのようだ。クラナさんはイエスタが離れないように声をかける。

「イエスタちゃん、大丈夫？　ちゃんと付いて来てる？」

「お、おおう、ぶへあつ」

イエスタの姿は見えないがどこから声は聞こえてくる。どうにか付いては来ているようだな、よかった。

「ぶはあつ、ぶはあつ」

もがきながら進むイエスタ。かわいそうだがあと少しだ、がんばれ。

「よし、畑を出たぞ。蝶もいるぞ」

ひまわり畑の広さはそれほどでもない。すぐに畑を通り抜けてただの草むらへと出る。そして、俺とクラナさんの目の前には様々な種類の木がまばらに生える森が姿を現した。

「ふえ〜、大変だった。死ぬかと思った」

ひまわりの間からひよつこりと出てきたイエスタ。

「ひまわりの大きな葉っぱが顔にまとわりついてくるんだ。息が苦しかった。細ネギが鼻の奥に挟まったときくらい苦しかった。本当に死にそうだった。もう少して死因『ひまわり』とかになるところだったぞ。あぶなかった」

白い神官服や頭についたたくさんさんの葉っぱを払うイエスタ。見たところイエスタも大丈夫そうだな。まだ三人とも元気だし蝶も見失っていない。今のところは順調だな。

「このチヨウチヨメ、変なところを通りやがって。次はどこに行くつもりだ？」

恨めしそうに蝶を見るイエスタ。すると蝶はふらふらと先にある森の中へと入っていった。

「げっ。神殿山の森の中に入っていったわよ、あの蝶足が止まるクラナさん。」

「あたし、ここ、嫌いなよね。暗いしじめじめしてるし。できれば入りたくないんだけど」

俺とイエスタは森の中に入るのをためらっているクラナさんをよそに蝶を追って中に進もうとする。

「なに言ってるんですか、クラナさん。このくらいのことであきらめてどうするんですか」

「クラナよ、来ないなら宝物はわたしとユトー、二人だけのものだぞ。それでもいいのか？」

「……はあ、仕方ないわね」

クラナさんは大きなため息をつきつつ森の中に足を踏み入れる。

「宝物はともかくとして、ラジックの研究が直接できる機会を簡単に見逃すのも嫌なものね。あたしも行くわ」

俺たち三人は蝶を追って神殿山の森の中へと入っていった。

「よし、この先は何があるか俺もよくわからない。気をつけて行く」

俺を先頭に三人は木々の間を歩いていく。神殿山の森、ここは俺もあまり入ったことはないし滅多に人が来ることもないところだ。

いちおうこの山は町の所有地になっているから勝手に入ってはいけないことになっているしな。そんなに大きな森ではないので遭難するようなことはないだろうが何の頼りもない森の中だ。中に入るとなると不安なのは確かだ。危険な動物でもいなければいいのだが。

「思ったより木が多いな。道らしい道もないし」

森を形作る大小様々な木々の間はかなりせまく、人が一人か二人ぐらい通れる隙間があるのがやっとだ。足下にはびつしりと草が生えていたり枝が転がっていたりして足場もあまり良くはない。滑らないように注意しながら進む。

「だが、なんとか蝶に付いていくことはできそうだな」

幸いなことに目の前を飛んでいく蝶のスピードは先ほどよりも遅くなってようだ。蝶のほうも慎重に進む方向を選んでいるようにも見える。木漏れ日の中を黄色い蝶がゆつくりと飛んでいく。

「それにしてもこの森の中、やけに蒸し暑いわね。湿気がすごいわ。なんか南米とかのジャングルにいるみたい」

クラナさんの言うとおり確かに蒸し暑い。一瞬で服は汗まみれになってしまった。気温も湿度もかなり高い。この森、ここだけエベスツルの気候ではないみたいなところだな。

「うおっ、なんか今、聞いたこともないような動物の声が聞こえたぞ！」

慌ててきよろきよろと辺りを見回すイエスタ。

「ん、声だつて？」

俺は耳をすませてみると、

「キエエエエキヨキヨキヨオオオオオオオオオオ……」

な、なんだ、この鳥のような猿のような甲高くて鋭い声は！ こんな声の動物、俺も知らないぞ。何が住んでいるんだ、この森には相談所の裏に変な生き物が住み着いているなんて考えたくもないぜ。

「……まあ、ここは聞かなかったことにしておこう」

俺たちは先を急ぐ。

「な、なんだこりゃ？」

少し行くと俺たちの斜め前ぐらいの位置に、なにか馬鹿にでかい植物のようなものが生えていた。俺の身長ぐらいありそうな背丈で、頭の位置には両腕を広げたほどの大きさの花が咲いていた。

「き、気持ちの悪い植物だな……」

毒々しいほどに赤い色をした花だ。さらに、その大きな花の下にはいくつもの長くとげの付いた蔓のようなものが伸びていた。見るからに何かありそうでできれば近づきたくはない植物だが蝶がその植物を飛び越えて進んで行くので俺たちも付いて行かざるをえない。「仕方ないな。そつと通り過ぎよう」

俺たちがその植物の近くに来たそのときだ。

「シャアアアア！ シャアアアアア！ シャアアアアア！」

その長い蔓が突然、俺たちに向かって襲いかかってきた。触手のように俺たちの体を巻き取るうとなって伸びてくる。

「ぎゃあああああ！」

その蔓を振り切つて、蝶を追い越すように走る俺たち。

「逃げろおおおお！」

しばらくして。

「はあつ、はあつ、みんな無事か？」

うなづくイエスタとクラナさん。なんとか無事に逃げ切つたようだな。あぶなかつたぜ。それにしてもなんだありゃ？ 食虫植物ならぬ食人植物か？ あんな恐ろしい植物が生えているなんてない。いたいここはどういう生態系をしているんだ。この森、普通に危険じゃないか。誰も人が足を踏み入れない理由がわかつた気がする。

その後も。

「うわー、ぐにやつ、てするもの踏んだ！ キモい！」

「なんか垂れてきた。うつ、くせえ！ めちゃくちゃくせえええ！」

「ちよつと誰よ、あたしの服を引っぱつたのは？ えつ、誰も引っぱつてない？ えええええつ？」

なんかもう、いろいろ起こつて大変だ。なんなんだここは、未開のエリアすぎるぞ。仮にも文明的な町の中にある場所ではないな。

「……神殿山、恐ろしいところだな」

だが、めげずに俺たちは蝶を追って森の中に深く入っていく。そんな様子でおよそ三十分ぐらい森の中を歩いていったときだった。

「あつ……！」

急に目の前の視界が開けた。

「な、なんだここは？」

雑多な木々で埋め尽くされたうつそうとした森の中を歩いていたはずの俺たち。だが、目の前に現れた場所はまったく木の姿はなく短い芝生だけが生えた、まるで公園の一角のような場所だった。

「なぜ、ここだけ木が生えていないんだ？」

広さは十メートル四方ぐらいだろうか、それほど広いわけではないがこの場所は周りの森とは線で区切ったかのように背の高い植物が生えていない。明らかに不自然であり妙な気分させる場所だ。ここにいると俺たちが森の中にいることをすっかり忘れてしまいそうになる、そんな空間だった。

「神殿山の森の中にこんな場所があるとは……」

イエスタも驚きを隠せない。

「神殿の神官であるわたしもご先祖さまからこんな場所があることはまったく聞かされていない。おそらく誰も知らない場所だろう」

クラナさんも木々に囲まれた四方を見渡しながら言う。

「この辺の航空写真は前に見たことがあるけど、こんな場所は記憶にないわね。きつと写ってなかったはずよ。不思議なところね……」
一歩二歩と芝生の上を歩いていく俺たち。肝心の蝶はとうとうなぜかもう逃げはしないようだった。この場所の中央あたりの位置でひらひらと舞っているだけだった。

「蝶は逃げないな。ということは、ここがゴールなのか？」

俺がそう言ったときだった。目の前の蝶が急に大きな光を放ち始めた。光はあつという間に強くなり、まばゆいばかりの光に俺たちは完全に視界が奪われる。

「うつ、なんだっ？ 何も見えんっ！」

だが、その光はすぐに消えていった。ほんの数秒の間に大きな光がふくれあがってしぼんだ、という感じだ。俺たちの目も回復する。そして、その俺たちの目に映ったものは、

「だ、誰だ、おまえはっ？」

光の中心、今まで蝶がいたところにはすでに蝶の姿はなく、その代わりにいたのは一人の男性の姿だった。

「きゃあっ！ なにこいつっ！」

彼の姿を見て叫ぶクラナさんとイエスタ。無理もない。

「変質者よっ、変態よっ！」

その男、年は中年ぐらい、格好は上半身は素っ裸で下は黄色いぴつちりとしたパンツとシューズだけ、というものだったからだ。

「ち、違うぞっ。俺は変質者でも変態でもない！」

そのおっさんは慌てて弁明するが、

「うるさい、この変態！ わたしたちに近寄るな！」

イエスタとクラナさんはその辺に落ちている石や小枝を投げつけたりする。そのおっさんは筋骨が隆々とたくましい体つきでまるでプロレスラーのような風貌だ。もしくはやはり変態か。とにかく森の中でこんな男が突然現れたら誰だって驚いて警戒することは間違いないだろう。

「痛っ、痛い。ち、違うんだっ。ちょっと落ち着いて俺の話聞いてくれっ」

石や小枝を体に浴びながら叫ぶおっさん。

「お、俺はラジックの神様の使いだ。さっきまで君たちが追いかけていた蝶の本当の姿、それが俺なんだ」

その言葉を聞いてものを投げるのをやめる二人。

「ラジックの神様の使い？ 蝶の本当の姿？」

「そう、そうなんだ。信じてくれ。あっ、そうだ、証拠を見せよう。もう一回、蝶の姿に変身してみせるから」

そう言うとおっさんのおっさんの体がぼわっ、と淡い光に包まれる。

そして、おっさんは消えてまた見慣れた黄色い蝶の姿がそこに現れ

た。

「おおー。本当だ、あの蝶だ」

驚きの声を上げる俺たち。蝶の姿はまたすぐに光とともにおっさんの姿に戻った。

「どうだ。これで信じてもらえただろうか」

「……うん、まあ」

いちおう納得する俺たち。蝶がおっさんに変身する、考えられないシチュエーションだが目の前で実際に起こったのだから信じるよ
りない。ああ、まったくラジックとは変なものだな。もう少し現実
というものを尊重してほしいものだ。

「それで、おっさん……」

俺は尋ねる。

「なんでプロレスラーみたいな格好をしているんだ？」

おっさんは答える。

「それは俺がプロレスラーだからだ」

もう一度、尋ねる。

「なんで神様の使いがプロレスラーなんだ？」

「なんで神様の使いがプロレスラーじゃいけないんだ？」

「……もういいです」

なんかまともな答えが返ってくる気配を感じなかった俺はすぐに
この会話をやめる。いいさ、別に。プロレスラーでもなんでも。ど
うぞ好きにやってくれ。

「さて、諸君」

太い腕を組んで仁王立ちで話し始めるおっさん。

「よく俺を追ってここまでやって来たな。誉めてやるう、よくやつ
た。はっはっは！」

なぜか高笑いを上げるおっさん。それから、

「まずは最初の勝負、追いかけては君たちの勝ちというわけだ。

おめでとう」

今度はパチパチと拍手を送ってくる。クラナさんは訊く。

「最初の勝負？ まだ何かあるの？」

「ああ、もちろんだ。おまえたちは三人でここまで来た。ということとはあと二つの勝負をおれしてもらうことになるな」

「……あと二つ」

イエスタも訊く。

「その勝負に勝つとどうなるんだ？ 宝物をくれるのか？」

「ん？ おまえたちは宝物が欲しいのか？」

「ああ、そつだ！ すごく欲しい！」

おっさんはやりと笑って答えた。

「そつか。いいだろう。もし俺との勝負に勝ったら宝物をくれてやるつー！」

「ほ、本当かつ！」

思わず叫び声を上げる俺とイエスタ。

「いやっほおおおお！」

まさか本当に宝物がもらえるとは。すごいな、ラジックは。今まで関わってきた甲斐があったってもんだ。

「たっからものっ！ たっからものっ！」

俺もイエスタもこの展開にテンションは最高潮だ。宝物はついに手の届くものとなった。ここまで来たらなんと少しでも手に入れないければな。

「やるぞ、イエスタ！」

「おつ、ユトーー！」

だが、おっさんはそんな俺たちに不敵な笑みを見せる。

「おいおい、喜ぶのはまだ早いんじゃないか。俺に勝つのは簡単じゃないぞ」

俺とイエスタもおっさんを見る。

「……そつだな」

確かに相手はラジックの神様の使いだ。楽に勝たしてはくれないだろう。喜ぶのは勝負とやらに勝ってからだな。

「それで、勝負とはいっただいどういうものなの？」

クラナさんの質問におっさんは、

「うむ。勝負は一对一で行う。そして、おまえたちは三人いるから三本勝負で先に二本を取った方の勝ちだ。ラジックの使用者であるおまえ、クラナとかいったな、おまえは俺との追いかけてここに勝ったからまずそちらの一勝だ」

おっさんは俺とイエスタを見て、

「あとはおまえたち二人のうち、どちらか一人が俺に勝つことができれば宝物はおまえたちのものだ」

俺はおっさんに鋭い視線を送る。

「わかった。勝負の内容はなんだ？」

「男よ、おまえは俺とプロレスで勝負してもらおう」

「な、なんだってえええええ！」

「何を驚いている。俺はプロレスラーだ。プロレスをするのは当たり前じゃないか」

「いや、そんなこと言われても……」

こんなマツチヨなおっさん、しかも自称プロレスラーとプロレスで戦って勝てるわけじゃないじゃないか。

「くそつ、宝物をくれてやるとか言っても、これじゃあ詐欺みたいなものじゃないかよ」

がっくりと肩を落とす。おっさんはそんな俺に言う。

「安心しろ。その代わり、もう一人のおまえ」

おっさんはイエスタの方を見て、

「おまえは自分の好きなことで俺に勝負を挑んでもいいぞ」

「わたしの好きなこと？ なんでもいいのか？」

「ああ、この場所のできることならなんでもいい。おまえの得意なことでも俺に挑戦してくるがいい。ま、俺はどんなことでも負けることはないがな。はっはっは！」

イエスタはじつとうつむいて考える。

「……わたしの得意なこと、か」

なるほど。これならまだ俺たちにも勝機はあるな。俺がこのおっ

さんに勝つのは絶対に無理だろう。ここはイエスタに頑張ってもら
うしかないな。

「これで説明は終わりだ。理解したか？」

「……ああ、わかった」

うなづく俺たち。おっさんは肩をぐるぐると回しながら俺を見る。
「なら、さっそく始めよう。イツツ・ア・シヨータムだ」

おっさんは指をパチン、と鳴らす。するとだ。俺たちのいる場所
が再び大きな光に包まれる。

「うっ、今度はなんだ？」

光が消えたあと、俺たちの前に現れたのは一段高い正方形の土台
の上にロープで四方が囲まれていて床にマットが敷いてあるもの、
いわゆるリングだった。

「さあ、男よ。早くこのリングの上に乗ってこい」

いつの間にか奥の赤コーナーの付近に立ったおっさんは俺を手招
きする。

「し、しょうがない。行くしかないな」

俺はロープをくぐってリングに立つ。おっさんとは反対側の青コ
ーナーだ。そして、そのリングの上にはどこから現れたのかまた別
のおっさんが二人いた。一人は白いシャツ姿でリングが上がった俺
のボディチェックを素早く行う。おそらくレフリーだろう。

「ただいまよりLWGP無差別級のタイトルマッチを行います」

もう一人はタキシード姿でマイクを手にやたらといい声で話し始
める。どうやらリングアナウンサーのようだ。

「青コーナー、挑戦者……」

俺の方を向いて続ける。

「175センチ65キロ。どうして俺はいつも大変な目に遭わされ
るんだ？ 『ラジック相談所の迷えるファイター』 ユトー・モンド
ペリイイイイ！」

いきなりコールされる俺。なんか変な二つ名も一緒に付けられて
いるが気にしないでおこうか。

「ユトー君、怪我しないようにね」

「ユトー、がんばれ！ 宝物のためだ、死ぬ気でやれ！」

リングサイドで声をかけてくるクラナさんとイエスタ。まあ、宝物は欲しいが相手が相手だ。適当に頑張るよ。

「続きまして赤コーナー、チャンピオン……」

アナウンサーはさらに大きな声でコールする。

「190センチ125キロ。偉大なるラジックの神様の使いでありプロレスマスター『イエロー・タイフーン』ミスター・バタフライイイイイ！」

「うおおおおお！」

両腕を上げて雄叫びを上げるおっさん。

「ユトーとやら、覚悟はいいな？」

いいわけないだろ！ だが、そんな俺の気持ちにもかかわらず試合は始まるうとしていた。アナウンサーがリングから降りてレフリーが叫ぶ。

「ファイト！」

カーン、と打ち鳴らされるゴング。ついに始まってしまった。

「はあああ！」

いきなり俺に走り寄ってくるおっさん。

「うわわっ」

当然、逃げる。

「待ていっ！」

だが、あっけなく腕を捕まれる俺。おっさんはそのまま俺の体をロープに振る。

「ふんっ！」

「わわわわっ」

ロープに当たって跳ね返ってくる俺に対しておっさんはリアアクトをかましてくる。

「ふべしっ！」

俺は首筋にリアアクトをくらって派手に反転してマットに倒れる。

「……う、うげええ」

マットの上で苦痛にうめく俺。な、な、なんだ、今のはっ？ い、痛いなんてもんじゃない。意識が吹っ飛びそうになったぞ。このおっさん、俺を殺す気かっ。

「まだ始まったばかりだぞ。さあ、立て」

おっさんは理矢理に俺を立たせる。すでにふらふらになった俺に對しておっさんはさらに技を掛けてくる。

「くらえ、正固めだ！」

立ったまま俺の首に片足をかけて腕を上締め上げてくる。

「うぎゃあああ痛い痛い痛い痛い痛いっ！」

肩とか首とかがすごく痛い。あまりの痛さに意識が遠のきそうになる俺。するとおっさんは技を解いて、

「はあ、はあ……た、助かった……」

安堵する俺に

「次は、コブラツイストだ！」

「へ？」

今度は別の技を掛けてくる。俺の首と腕と足を固定して、体をねじ切るようにひねってくる。

「痛い痛いまた痛いもつと痛いものすごく痛いいいいいい！」

背中とか腰とかがすごく痛い。呼吸も苦しい。このままじゃ死んでしまう。間違いない、死んでしまう。

「はっ、そうだ！」

俺は思いついた。そうだ、ギブアップしてしまおう。もう宝物とかどうでもいいや。死ぬよりはましだ。

「ギ、ギブア……」

俺はなんとか降参の声を出そうとするが。

「このミスター・バタフライの連続攻撃はまだまだ終わらんぞ！」

おっさんはそのままの体勢でボタンと俺の体を自分の体ごとマットに倒してから、また新たな技を掛けてきた。

「ここでローリンググレイドルだ！」

痛い？ いや、そんなもんじゃない。激痛の渦に巻き込まれてなんかすべてが吹っ飛ばされたような感覚だ。

「……………」
し、死んだのか、俺？ ぼんやりとした意識の中で自問自答をす
る。い、いや、なんとか生きているようだ。意識はかるうじて残っ
ている。しかし今は全身の痛みや疲労で指一本動かすことができな
い。仰向けに倒れた体はピクピクと痙攣している。

「試合終了!!」

そんな俺の耳にレフリーの声、カンカンカーンと試合を終えるゴ
ングの音、アナウンサーの声などが入ってくる。

「勝者、ミスター・バタフライイイイイ!!」

「うおおおおお！ アイ・アム・チャンピオン!!」

両腕を高く上げて勝利の雄叫びを上げるおっさん。俺みたいな
が相手でも勝ったのは嬉しいんだろうな。いちおう宝物を守って
いるわけだし。対して俺の方も試合が終わって非常に嬉しい。とい
うか心底からほっとした。俺としては勝負なんてどうでもいい。と
にかく生きていられた、それだけで儲けものだった。

「……………や、やっと終わった」

多少体が回復した俺はどうかこうにかリングサイドへと戻って
いく。もう二度とプロレスなんかするもんか。俺は固く固くそう誓
ったのだった。

おっさんは勝利パフォーマンスに一段落をつけると、

「さて、これで一勝一敗の五分だな」

今度はリングサイドのイエスタの方を見る。

「次はおまえだ、小娘。今こそ決着をつけようではないか!」

イエスタは無言のままリングに上がってくる。そして、口を開い
た。

「……………いいだろう、おっちゃん。わたしが相手になってやる。死ん
でいったユトーの仇、わたしが取る!」

いやいや、俺は死んでないぞ。まあ、その心意気は頼もしいが。

「あくまで宝物を手に入れるついでだがな！」

「ついでかよ！ しかも、いちいち言う必要のない台詞じゃないか、それは。」

「そいつは威勢がいいな。さあ、教えてもらおう……」

おっさんはイエスタにびしっと指を突きつける。

「勝負のお題はなんだ！」

この三本目の勝負、たしか内容はイエスタが好きに決めてよかつたんだっけ。イエスタにだけ有利な内容の勝負を仕掛けることができればやつに勝つチャンスは大きく広がるはずだ。ここはイエスタの選択に注目だな。

「……ごくり」

俺もクラナさんもイエスタの言葉を固唾を飲んで待つ。

「勝負のお題は……」

「勝負のお題は？」

そして、イエスタは言った。

「しりとり、だ！」

は？ しりとり？ 俺はその言葉を聞いてあっけにとられる。な、なんだか宝物を賭けた戦いにふさわしくないお題だな。確かにイエスタの得意なことなんて俺は知らないが、しかし、しりとりとは……。

「し、しりとりい？」

おっさんも意表を突かれたようだ。

「しりとり、ってあの言葉遊びのしりとりのことか？」

「ああ、そうだ。ほかにどのしりとりがあるって言うんだ」

「わ、わかった。しりとりで勝負だな。了解した」

おっさんは一瞬失いかけた落ち着きを取り戻す。

「どんな勝負だろうとラジックの神様の使いである俺は負けるわけにはいかないのだ。俺は絶対にしりとりでおまえに勝つ！」

イエスタも負けじと言い返す。

「わたしに勝つだと？ 望むところだ！」

望むなよっ！

「……イエスタちゃん、その返しは変よ」

クラナさんもツッコむ。イエスタのやつ、こんな国語力でしりとりなんかの勝負をして本当に大丈夫なのか？ 俺はいきなり不安になつてきたぞ。

「と、とにかく頑張つてね、イエスタちゃん」

「おう、クラナ。まかせておけ」

自信満々の表情を見せるイエスタ。頃合いを見てアナウンサーがリングの上にあがってマイクで話す。

「ただいまよりLWGP無差別級のタイトルマッチ最終戦を行います」

アナウンサーは先ほどと同じよう二人を紹介するとリングを降りていく。リングの中央で睨み合うイエスタとおっさん。その間でフリーがルールの説明をする。

「お題はしりとり。制限時間は一回につき三秒未満。先攻は挑戦者イエスタ・レン。いいですね？」

うなづく二人。

「イエスタちゃん、いよいよ最後の戦いね」

リング上をイエスタの姿を見守るクラナさん。レフリーの声とゴングの音が緊張感みなぎる二人の間を切り裂いた。

「ファイト！」

まずイエスタが叫んだ。

「ラジック！」

おっさんも大きな声で言う。

「く、首固め！」

イエスタはすぐさま返す。

「飯抜き！」

「飯抜き？ き、木戸クラッチ！」

「ちり紙！」

「ミドルキック！」

「苦肉の策！」

「クロスヒールホールド！」

「どつぼ！」

「どつぼ？ ボディプレス！」

「空きっ腹！」

「ランニングネットクブリーカー！」

「開店大売り出し！」

「し、し、シャイニングウイザード！」

リング上で繰り広げられるイエスタとおっさんのしりとりバトル。一秒や二秒といった短い時間の中で次々と言葉が飛び交う。

「百円均一！」

「ツームストンパイルドライバー！」

「バーゲンセール！」

「る、る……ルー・テーズ！」

お互いにすさまじい気迫と緊張感だ。見ているだけの俺たちですら息をのむ。

「しりとり……なかなか馬鹿にできないわね。これは一瞬でも気を抜いたら負けてしまうわ」

「そうですね。イエスタもなかなか良くやっている」

今のところ二人とも互角か、それともイエスタが少し押ししているぐらいだろうか。さすがに自ら選んだお題だけあってイエスタはしりとりが得意なようだ。まだ始まったばかりだがこれなら行けるかもしれない。がんばれ、イエスタ！

「ブレーンバスター！」

おっさんはまるでプロレスしているかのような構えをとったままでしりとりを続ける。

「ただ飯！」

イエスタも見よう見まねで格闘技っぽい体勢をとっている。

「掌底アッパー！」

「パンくず！」

「頭突き！」

「金銭トラブル！」

白熱する二人のしりとり。どうやらおっさんの方はプロレス関係の言葉が多いようだ。やはりとっさに出てくる言葉というのは普段から頭に染みついていてるものなのだろう。

「バックドロップ！」

「プアーライフ！」

対してイエスタの方は……。

「な、なんだかイエスタちゃんの言うことって、なんていうか、その……」

クラナさんも俺と同じ感想をもっているようだ。そうイエスタの言葉はものすごく、

「……貧乏くさい、ですよね」

「……やっぱりそうよね」

イエスタのやつ、しりとりに強いのは素晴らしいことなのだが、いちいち言うことが貧乏くさいのが気になるな。やはりイエスタも普通の貧しい生活が出てくる言葉に大きく影響しているのだろう。

「な、なにか悲しくなるわね」

「そうですね、貧乏って嫌ですね」

本当にがんばれ、イエスタ。宝物は、貧乏生活の出口はもうすぐそこだぞ！

イエスタは気迫のこもった表情で続ける。

「無料サンプル！」

「ルチャリブレ！」

「レディース割引！」

「キーロック！」

「苦しまぎれ！」

「レッグブリーカー！」

「金拾い！」

「イズナ落とし！」

やがて額に大粒の汗をにじませるイエスタ。すんなりと言葉が出なくなる。

「し、し、試食めぐり」

「リストクラッチ！」

「ち、ち、ちくわぶ？」

「ブリザードスーププレックス！」

「す、す、す……素パスタ」

ここに来て言いよどむことが多くなってきたイエスタ。レフリーの眼も光る。

「タイガースーププレックス！」

「す？ 素うどん……い、いやなんでもない！ 素カレー！」

勝負の形勢はおっさんの方に傾いてきたかもしれない。やはり、大人と子供ではボキャブラリーに差があるのは仕方のないことか。

「持ちこたえろ、イエスタ！」

「イエスタちゃん、あなたなら勝てるわ。自分を信じて！」

俺たちも必死に応援する。しかし。

「レッグロックスーププレックス！」

「えっ？ また、す？ えっと、す、す、す……」

「まずい！ イエスタの言葉が出てこない！」

ついに勝負あったか。俺たちがあきらめかけたそのときだった。

「……もういい」

イエスタの番で口を開くおっさん。レフリーがおっさんを鋭く見る。そして。

「俺の負けだ、少女よ」

突然、ギブアップの宣言をしたのはおっさんの方だった。

「ええっ！ 相手の方がギブアップ？」

「なっ、ど、どういうことだっ？」

あまりのことに混乱する俺たち。イエスタも呆然としている。そんな中、おっさんは静かに話し出した。

「……おまえの口から次々と出てくる貧乏くさい言葉の数々。俺に

はもう耐えきれない」

おっさんの眼からは涙が流れ落ちていた。

「おまえみたいな子供がこれほど貧乏が染みついた生活を強いられているとは……。なんて悲しいことなんだ。俺にはこれ以上しりとりを続けることはできない。おまえみたいな不幸な少女から勝利を奪うなんてことは到底できない」

おっさんは涙ながらに言った。

「少女よ、イエスタと言ったな……。この勝負、おまえの勝ちだ」

今まできよとんとしていたイエスタはその言葉を聞いてはっとした顔を見せる。

「わたしの勝ち？ そ、それは本当かつ？」

「もちろん本当だ」

「じゃあ、宝物は……」

「うむ。おまえたちのものだ」

一瞬の間をおいて、俺たちの喜びは爆発する。なんだかよくわからないがイエスタはおっさんとの勝負に勝ったらしい。

「やったあああああ！」

「たっからものっ！ たっからものっ！」

「イエスタちゃん、やったわね！ すごいわ！」

歡喜の声とともに腕を振り上げる俺。飛び跳ねるイエスタ。そのイエスタに抱きつくクラナさん。ついに、ついにだ。宝物が手に入るわけだ。こんなに嬉しいことはない。人生で一番嬉しいことだと言っても過言ではないだろう。本当によくやったぞ、イエスタ。今日のおまえは英雄だ。間違いない。

「ばんざーい！ ばんざーい！」

ひとしきりみんなでこの喜びを味わう。

「ラジックの神様、ばんざーい！」

それから、イエスタはおっさんのもとに駆け寄っていった。

「さあ、おっちゃん。宝物をくれっ！」

「よし、いいだろう。今、出してやる」

「おおっ！」

何が出てくるか眼を輝かすイエスタ。ラジックの神様の宝物だ。それはすごいものが出てくるのだろっ。俺も期待せずにはいられないな。

「さあ、宝物を出すぞ」

パチン。おっさんは例のごとく指を鳴らす。おっさんの両腕の中が光に満たされる。そして、その中から現れたものは……。

「へっ？」

おっさんの持っているもの見て頭に疑問符の浮かぶ俺たち。

「……なにそれ？」

「これが俺から君たちに送る最高の宝物……」

おっさんは高らかに言った。

「チャンピオンベルトだ！」

「……なんだって？ 思考が止まる俺たち。」

「チャンピオンベルト？」

「そうだ。これで今から君たちがLWGPのチャンピオンだ。そしてこれがその名誉ある証、チャンピオンベルトだ！ おめでとう、受け取りたまえ！」

口をぽっかりと開けたまま立ちすくむイエスタにそのベルトを渡すおっさん。

「……」

ベルトを手に相変わらず立ち尽くしたままのイエスタ。

「……」

誰も何も言わない。なので、

「もしかして……」

仕方なく俺が気の進まない、本当に気の進まない確認をしなければいけないかった。

「宝物ってそのこと？」

俺はイエスタの持っているベルトを見る。しかも、そのチャンピオンベルトとかいうもの、大きめのベルトにプラスチックの飾り

がittedただけというかなりしょぼいものだ。

「ああ、もちろんだ」

おっさんはなぜか誇らしげに言う。

「プロレスラーにとってチャンピオンベルトは何よりもの宝物だからな」

……なんてこった。つまりこのおっさんの言っていた宝物っていうのは金銀でも財宝でもなんでもなく、このただの安っぽいちやちなベルトだったってことか。

「あ、あのさあ……」

俺はわずかな望みを持つてもう一度おっさんに訊く。

「ほ、ほかになんかはないの？　せめて賞金とかさあ？」

「……そう言われてもな」

おっさんはしれつと言う。

「俺はほかのものなんて何も持っていない。俺は神様の使いと言ってもただのレスラーにすぎないんだからな。チャンピオンベルト以外のものは特に持つてはいないな」

「……そ、そう」

やっぱり。訊くだけ無駄だったか。ああ、なんてこった。今まで心の中にあつた夢ががらがらと音を立てて崩れていく。

「こ、こ、こ、こ……」

ぶるぶるとベルトを持った手を震わすイエスタ。

「こなもん、いるかあああああああああ！」

イエスタの怒りの叫びは神殿山の森に大きく響き渡ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7463u/>

ラジックの相談所 第三話

2011年7月11日03時30分発行